

こかの古本屋に埃をかむって売れ残りがあるらしい。思いがけない土地の、見知らぬ人から、いまだに古本屋で買って読んだという手紙をもらうことがある。

うれいような、首を縮めたくなくなるような思ひだ。

私の本の中には、貧乏記者の家庭生活を書きとめた部分も幾つかあったが、古本で読んでくれた若い読者など、十年という歳月を無視して私の妻のイメージを抱いている人もあるらしい。つまり私も妻も白髪が目立ち、私の本も古本屋の棚

で十年の埃と手垢にまみれているのが現実なのに、本の中の妻だけが若々しく印象づけられるらしいのだ。こんな手紙が来たことがある。——「ぼくも詩を書いていきますので、あなたの四つの詩集と一つの編著は、出るたびに買って読みました。しかし、古本屋で偶然みつけたあなたの随筆集は、詩集にない感動を受けました。私はあなたのファンというよりもあなたの奥さんのほうを好きなのかも知れません」と。これはどういふことなのであろう。

新古今の美学 田尻嘉信

保元以来、戦乱が続き社会の秩序は乱れ、加えて地震、大

火、飢饉、疫病等災厄の頻発に世相は一段と不安の色を増した。そして平家の没落、源氏の抬頭と、世は次第に武家の支配を確立し、公家の衰退を如実に示した。この騷擾と栄枯盛衰の相が濁悪末世の感を深め、無常観を誘った。公家にとって不如意の憂愁が心に刻む傷痕の深きは、やがて王朝の風雅の伝統に支えを求めさせ、現実の儚さの外に在るべきひとつ

の相を教えたのである。

新古今集が、建仁元年十一月の院宣以来、前後四年の歳月を費して撰進されたのは、元久二年三月二十六日であった。

その夜、宮中春日殿に催された競宴で、後鳥羽院は、

いそのかみ古きを今にならべ来し昔の跡をまたたずねつ

と述懐され、建久九年、土御門天皇に讓位後、自ら歌壇を主

宰して意欲的に進めた撰集事業の終了した感慨を深く披歴された。正治二年の両度の百首歌を始め、千五百番歌合の披講、和歌所の設置と、その動きは急速に昂まって、遂に竟宴を迎えたのである。増鏡、源家長日記には院の異常な情熱が描かれている。集名の「新古今」は、正に古今集の昔を追慕し、古今の秀歌を聚めて、風雅の伝統を継承すると共に、至難な時代の新たな生命を内に育む抒情の高揚を顯示するのである。撰集を全うされた院の感動は言葉に尽しがたい。撰政太政大臣藤原良経は応和して、

敷島の大和ことばの海にして捨いし玉はみがかれにけりと慶祝の心をこめて詠んだ。院の感慨を沁々と体感するものの、風雅への共感であり、それに連る自負であった。安らかな君臣唱和の胸奥に風雅に寄せる当代の哀歎がこもっているのである。

降りつみし高嶺のみ雪とけにけり清滝川の水の白浪

吉野山さくらが枝に雪散りて花遅げなる年にもあるかな
道のべに清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ
心なき身にもあはれは知られけり鴨立つ沢の秋の夕暮れ
小山田の庵近く鳴く鹿の音に驚かされて驚かすかな
はるかなる岩のはざまに独りいて人目思はで物思はばや

真率な自己の表白が歌本来の抒情であるならば、この一連

の西行の歌には、平明の詠風の中に正統的な発想により作者の投影を見ることが出来る。自己と秘密との間に深い断絶の意識が働いているとはみえない。人生を無常と観じて俗異の係累を断ち、天地自然の閑寂の境に止住する心が見出した如意の世界である。捨身離位の思念が自在に作歌と自己とを結び無常変遷の哀歎をさながらに幽寂な抒情として結晶させたのである。新古今に九十四首と最多の撰入歌をみるのも不思議ではない。しかし新古今全体をみれば、西行的な自然な発想で実情のゆたかな歌は少い。むしろそれが異端と映る程に、多くは人間的な率直な情感を流露させる抒情の場と方法とを失っていた。後鳥羽院も西行を称揚しつつ猶、生得の歌人という別格の座を与えざるを得なかったのである。

西行と対照的に新古今歌風の主流を占めるのが藤原定家である。父俊成の薰陶で幼少から作歌に精進した定家は、治承四年の日記明月記に「世上乱遂追討耳に満つと雖も之を注せず、紅旗征戒吾事に非ず」と自ら恃み、自ら赴くところを示した。頼政、義仲、頼朝の拳兵、維盛の鎌倉追討と源平の争鬪は、定家には吾事の埒外であったのである。触目の日常生活は、感動を喚ぶに空しく、さりとて昔ながらに情緒本位に徒らに花鳥風月に心を託すことも滅びの側の負い目を意識させた。むしろ現実の秩序とは別の充足した世界が望まれた。歌として表現する意味の充実を感得できる安心の境域が必要であった。現実から遮断されて自足自在の世界は、風雅の虚

構を描いて外にない。現実には背反した幻想耽美の造型に専心することである。典雅な詞を駆使し題詠に打ちこむことに矜りある生命の燃焼をかけ、彫心鏤骨、刻苦懊惱することによって、観念の莊嚴は愈々深い陰翳をこめて輝きを増す。生々しい日常の哀歎とはかわりない、いわば人間不在の、唯美幽玄な作歌至上の世界である。限らない哀しみと憧れとが併在し、融合して、韻律と影像との交響調和する独自の詠嘆である。定家はそれを余情妖艶の語に示した。次に掲げるその作歌は正に非現実の美の極致を指呼するものであった。

春の夜の夢のうき橋とだえして峯にわかるる横雲の空

霜まよふ空にしをれし雁がねのかへるつばさに春雨ぞ降る

玉ゆらの露も涙もとどまらず亡き人こふる宿の秋風

忘るなよやどる袂はかはるともかたみにしほる夜半の月影
西行は歌詠み、定家は歌作りというように、定家はその典型であるが、新古今の歌は概ね歌作りを余儀なくされた苦渋の果ての結実である。表現態度、修辭、表現効果と分析すれば、様々な技巧工夫を凝らした歌風の特徴は極めて多彩であり、多方面に至っている。(感覺的・耽美的・客觀的・構成的・感傷的・音樂的・物語的・象徴的・絵画的・本歌取・本説歌・一句切・三句切・体言止等)優艶巧緻、感傷夢心の世界が展開しているが、様々の知巧の極をゆく作歌は、自らまた不易なる風雅の相を暗示するものでなければならぬ。

新古今集の成立事情、また作歌技法の独自性を鑑賞享受という評価の面で考えると、実際は極めて厄介である。正当にして充分な評価という面で新古今集享受史をみると、かなり酷薄なのが事実である。中世の隠者の系列や連歌に属する人たち、正徹、心敬、近世で芭蕉は出色の存在である。東常縁の新古今集に始まる注釈史では、本居宣長(美談の家つと)石原正明(尾張藤家宅)に指を屈するが、反面荒木田久老、村田春海、飯田年平等の反論が続いた。近世の学問や教養の体系で、新古今集が惣じて十全な地位を得たとはいえない。明治に至ってもその期待は、むしろ強烈な万葉集主義の潮流の蔭に隠れた趣がある。

西欧近代の主潮である人間肯定の、いわば明瞭な反自然的意図に基く自我の文学にとって、新古今的な発想は勿論脈絡を示し得ない。しかし曲折を経たわが近代文学が、猶今日その西欧の正統的な「近代」に較べて、不毛の部分をかかえていることは否定できない。断絶しきれない伝統の問題であるが、ことにそれは韻文の分野で関係するところが多いようにみえる。その基本的性格の形成の上に、深い歴史の背景に支えられる意識の投影をみるからである。新古今的なものが今日の文学の問題としてかわりをもつのもその点である。

正岡子規は、

仰の如く近来和歌は一向に振ひ不申候正直に申し候へば

万葉以来実朝以来一向に振ひ不申候。(「歌よみに与ふる書」)

と述べて、単純明快に史観を示した。子規によれば、貫之は下手な歌よみ、古今集はくだらぬ集(雷び歌よみに与ふる書)であった。貫之や古今集を典型視する和歌史の思考慣習の無視であり、一種の偶像破壊である。それだけに子規の主張は性急で生理的でもある。この子規の文学観が由来するものは、やはり明治開化の舶来思想であろう。実作者として子規は、旧派の題詠一方の無感動に堪え得ず、そこに描かれる現実が虚像に化したことの空虚を知悉すれば、愈々生命感のある作歌への欲求を感じたのである。写生の語を援用して和歌革新を謳ったように、主張は先ずあるがままを写す、いわばその実感の上に自由清新な抒情の理想を求めた。万葉への共感は、学問によるのでなく、勿論また復古、擬古の類いでもない。そこに素朴な人間性の躍動と自由な心情の表出を求め、それが自ら心がける生命感の充実に直接重なり合う世界と映じたからである。

その限りでは子規歌論の根本は、甚だ素朴で健康な憧憬であり、自己と現実との融和に何の懐疑も批判もない明快な一辺倒である。極論すればそれは、自我の詩に青春を謳った与謝野鉄幹、晶子の新詩社の行き方とも、表面の対立相異程に径庭があったといえない。明治中葉の上昇期にあって、文学の近代化過程の浪漫の匂いが濃厚なのである。

少くとも子規は万葉による抒情の充足と、併せて、自己表

白の円成を確信と共に示している。内外の抑圧も疑惑もなく自己と現実とが作歌に融和した幸福で潑刺とした文学心であった。それは啓蒙期の制約を負った一面性としてやむを得ないことではあるが、子規の場合、革新の意欲に、歌の様式存立の理由にまで遡って純粹に創作の方法を凝視する意識はなかった。万葉傾倒が正当かつ充分な唯一の心像であった。写生が赴く対自然の面にしても、微妙で繊細な感覚の熟成がひとり万葉の問題でなく、むしろ万葉以降の韻文学の積みあげた特質であり、ことに新古今的な極致であったことに思ひ及ぶことはなかったのである。古今集の排撃が、マンネリズムの否定であり、「優美」の世界の追放であっても、その点、文学的な洞察として不穩当の難はまぬかれまい。子規は僅かに次のように述べるのである。

古今集以後にては新古今稍々すぐれたりと相見え候。古今よりも善き歌を見かけ申候。併し其善き歌と申すも指折りて数へる程の事に有之候。定家といふ人は上手か下手か訳の分らぬ人にて新古今の撰定を見れば少しは訳の分って居るのかと思へば自分の歌にはろくな者無之「駒とめて袖うちばらふ」「見わたせば花も紅葉も」杯が人にもてはやさるる程の者に有之候。(再び歌よみに与ふる書)

作歌の条件が隔絶しているのは当然であるが、単に好悪の面だけでなく、文学の問題として新古今的な世界が検討され

るべきことは、子規の時点でも、それ相当の歴史的な理由や背景があったはずである。明治の新文学観の中でこの定型文学の抒情の本質が、軽薄であったり邪道であったりしたはずはない。歌の抒情の極致として、表面から消えた主観の蔭に、その間接婉曲に描かれる情念の世界にかける作者主体の充足を、むしろ稀有なものとみるのである。

近代の洗礼をうけたリアリズムは、写生による自然と自己現実と感動との照応脈絡による一元化の表現を追っていった。現実と感動とを常にひとつの線上に捉え、自他合融に、その純粹直接的感動表現に生命の燃焼をかけた短歌主流は、当然、新古今的な人間不在の世界と異なるものである。しかしその近代の抒情が、変転する現実と妥協し安易な自己への誠実に墮する危険を孕むとすれば、当然、厳しい批判の精神は必要である。作者主体の充足をかけた内奥表現の問題であり、そこには新古今的な世界の達成した知的構成的な抒情の方法が全く無縁であるとはいえない。人生の哀歓を尽くした新古今の静謐な世界が、無味乾燥したメカニズムの増大に抑圧されがちな今日の人間性の恢復を志向するものとして、無類の純粹さ、鮮烈さ、神秘さをもって迫って来るにちがいない。文学の不思議である。

その点、子規の後、伊藤左千夫、島木赤彦、斎藤茂吉等、アララギに容れられなかった新古今集が、萩原朔太郎、立原道造の詩業を通じて顕われたことは、純粹無垢な感性の親和

力によるものとして大いに首肯されよう。そしてさらにゆたかな創造の源流として新古今的な抒情の発掘と展開が期待されるのである。